

日本人のスポーツ意識 I

沖縄県民の意識構造

池 田 隆 二*

Japanese Sense of Sports I

The Structure of the Sense of Sports in Okinawa

Ryuji IKEDA*

(Received August 7, 1972)

1 はじめに

沖縄県では、沖縄文教局保健体育課ならびに沖縄体育協会が推進力となり、1974年を目標にスポーツ振興のための諸条件の拡充整備を図ることを目的としたスポーツ振興総合計画、県民の健康・体力増強対策、県民体力づくり協議会の設立など、行政上の施策を推進する一方、競技力の向上、スポーツ団体の育成強化など体育・スポーツに力を注ぎつつある。

しかし、沖縄におけるスポーツは年々普及する本土のスポーツにくらべ、スポーツの大衆化やスポーツ技術の高度化等について格差を認めざるを得ない。このことは、沖縄がスポーツの未発達な地域ともいべき現況にあることを示している。

このような現況の中にあって、沖縄県民のスポーツ意識は本土の人々のスポーツ意識とかなりの共通性を有しながらも、その歴史的、社会的条件のゆえに沖縄独自のものがあるとも考えられる。そのような異同の実態を明らかにし、さらにそのよってきた原因を分析していくことは「日本人のスポーツ意識」とでもいべきものの特性を探るための重要な手がかりとなる。

1972年5月の沖縄の日本復帰を記念して、1973年5月に復帰を記念する国家的行事として現地沖縄において復帰記念沖縄特別国民体育大会が開催される予定である。

過去、本土における国体開催県のほとんどがそうであったように、沖縄においても国体の準備期間から開催までの間、政治的にも社会的にもスポーツに関するさまざまな波が住民の上におおいかぶさり、それが沖縄県民のスポーツ意識に強い影響をおよぼすことが予想される。その影響の仕方を分析することもスポーツ意識の変容の

メカニズムを明らかにする上で重要な作業である。

2 研究の目的

沖縄県民のスポーツ意識を本土復帰前、特別国体開催期間中、特別国体後数年経過時の3回にわたって調査し、それらの意識を分析することによって、スポーツ意識の変容過程をとらえることを目的とする。

今回報告するのは、そのうち、本土復帰前の沖縄県民のスポーツ意識の分析である。

3 研究の方法

〔1〕 調査票の設計

スポーツ意識について、本研究ではこれを「日本人のスポーツ意識」という大きな枠組の中でとらえ、調査項目の柱として、日本人のスポーツ意識の柱と考えられる次の3つの次元のスポーツ意識を設定した。

①の柱はスポーツが宣伝や進学、就職等に利用されてもよいというスポーツの実利的な面に価値を認めるのか、それともスポーツはそのような事柄に利用されるべきではないというスポーツの非実利的な面に価値を認めるのかというスポーツの「実利的価値観」対「非実利的価値観」（以下、スポーツの「価値観」という）のラインの調査であり、②の柱は、勝つことにスポーツの最終的な目標をおくのか、それとも勝負はスポーツの本質的な部分ではないと考えるのかというスポーツの「勝利目標主義」対「享受目標主義」（以下、スポーツの「目標観念」という）のラインでの調査であり、そして③の柱は、しばしば矛盾し対立するものとして登場するスポーツの大衆化と高度化のどちらを優先するものとするのかというスポーツの「大衆化志向」対「高度化志向」（以下、スポーツの「志向性」という）のラインでの調査である。

次に、調査をする場合、バックグラウンドとなる要因を調査しておくことが分析をすすめる上で必要となるた

*保健体育系列 (Department of Liberal Arts and Sciences
-Health and Physical Education)

め、次の事柄を調査項目として加えた。すなわち、④スポーツについての知識、⑤スポーツに対する関心、⑥スポーツ行動の実態、である。スポーツ意識はスポーツの知識、関心およびスポーツ行動と深くかわりあい、これらによって規定されるところが多いと考えられるからである。

スポーツに対する関心の度合は操作的には、スポーツとの接触の度合をもってその指標とすることができる。接触には、間接的なものと直接的なものとがある。前者は主として新聞、ラジオ、テレビ等マス・メディアを通じての接触であり、後者はスポーツの試合や練習を観覧に出かけていくのが主なものであろう。このような「見る、聞く」スポーツのほか、自分自身がどの程度スポーツを行なっているかということ、つまりスポーツ行動もスポーツ意識と相互に関連しあいながら、それを規定する要因として考えることができる。

その他、復帰記念特別国体に関連するものとして⑦沖縄国体に関する項目をくみ込むことにした。

以上のような設計にもとづいて、①②③についてのスポーツ意識とバックグラウンドとなる④⑤⑥および沖縄国体についての⑦に関する合計35項目からなる調査票を作成した。調査票の掲載は紙幅の関係で省略する。

〔2〕 調査の実施

沖縄県民のうち、割当による有意選択で質問紙法を採

表1 調査対象の内訳

階層 性別 地区	社会人	大学生	高校生	中学生
那 男	125	300	86	103
那 女	140	300	91	106
中 男	133	—	97	45
中 女	106	—	74	46
北 男	62	—	37	28
北 女	69	—	44	47
南 男	99	—	28	38
南 女	49	—	40	38
離 男	66	—	—	—
島 女	57	—	—	—
男女 男	477	300	248	214
計 女	421	300	249	237
合計	898	600	497	451

用。対象は中学生から社会人までの男女合計2,446名を地区別に網羅した。調査期間は昭和46年4月～6月。調査対象の内訳は表1に示すとおりである。

〔3〕 単純集計と項目分析

調査票回収後、調査全項目について単純集計をした。

次に、スポーツの価値観、目標観念、志向性を測定する尺度を作成するため、回収した調査票から200枚（中

については6項目、「スポーツの志向性」については3項目から成る尺度を構成することができた。

〔4〕 スポーツ意識の分析

A スポーツ意識の構造図の作成

意識の構造図を作成するにあたって、構造図を簡明にするため調査35項目の中から、スポーツに対する関心より1項目、スポーツ行動より2項目、スポーツの価値観より1項目、スポーツの目標観念より3項目、スポーツの志向性より3項目、沖縄国体に関するものより2項目の合計12項目を選び、それらの項目に対する反応をクロス集計し、 χ^2 検定することによって、2つの質問項目に対する反応の間の相関関係の有無を調べた。

その結果、1%レベルで有意な関連をもつものを実線で結び階層別、男女別にスポーツ意識の構造図の作成を試みた。その結果が、のちに示す図1である。

B スポーツ意識の分類と相関図の作成

スポーツの価値観、スポーツの目標観念、スポーツの志向性を測る3つの尺度の得点の幅は、表2に示すよう

表2 反応の得点化

次元	反 応	得点	項目数	得点の巾
価値観	実利的価値観に賛成	0	7	0点 14点
	中 間	1		
	非実利的価値観に賛成	2		
目標観念	勝利目標主義に賛成	0	6	0点 12点
	中 間	1		
	、 享受目標主義に賛成	2		
志向性	高度化志向に賛成	0	3	0点 6点
	中 間	1		
	大衆化志向に賛成	2		

に、それぞれ0点～14点、0点～12点、0点～6点である。得点が高いほどスポーツの非実利的価値観、享受目標主義、大衆化志向に意識が傾斜し、逆に得点が低いほどスポーツの実利的価値観、勝利目標主義、高度化志向に意識が傾斜していることを意味する。

この得点にもとづいて、スポーツ意識の分類を試みた。それぞれの尺度の得点の平均は表3に示すとおりであり、例えば「価値観」では、全体の平均が9.2点であるので、0点～8点を「スポーツの実利的価値観」に志向するタイプ、9点～14点を「スポーツの非実利的価値観」に志向するタイプと名づける。（0点～9点、10点～14点という分け方でもよいのだが、一方の比率が極端に大きくならないように配慮した）。以下、同じ方法でスポーツの目標観念では0点～6点を「スポーツの勝利目標主義」、7点～12点を「スポーツの享受目標主義」

表3 得点の平均と標準偏差

		社会人		大学生		高校生		中学生		全 体
		男	女	男	女	男	女	男	女	
価値観	$\bar{x}$	9.0	8.5	9.8	10.0	9.4	9.6	8.1	8.8	9.2
	σ	2.3	1.9	1.9	1.7	2.1	1.7	1.9	1.8	1.9
目 観	$\bar{x}$	7.0	6.7	7.4	7.4	7.0	7.5	7.0	7.1	7.1
	σ	2.4	2.2	2.4	2.0	2.3	2.5	1.9	1.8	2.1
志向性	$\bar{x}$	3.9	3.7	5.0	4.6	4.1	4.2	3.5	3.9	4.1
	σ	0.6	1.7	1.4	1.5	1.5	1.7	1.7	1.5	1.5
N		477	421	300	300	248	249	214	237	2,446

のタイプとし、スポーツの志向性では0点～3点を「スポーツの高度化志向」、4点～6点を「スポーツの大衆化志向」のタイプにそれぞれ分類した。

このスポーツ意識の分類を軸にして相互の関連を分析した結果が、のちに示す図2～図7である。

4 結果と考察

A スポーツ意識の構造

(1) 「小さな運動場か国際競技場か」の反応について

調査結果のうち、とくに注目をひいたのは、「毎年、小さな運動場を2つか3つ作れるだけの予算がある」とします。その運動場を数年間、1つも作らずにおけば立派な観覧席のついた国際試合をやれるような競技場を作ることができるのであれば、どちらを選びますか」という設問に対して、大学生を除いては「まず、国際競技場を」という答が過半数を占めたことである。

しかしそれは、現に国際競技場をもたず、また国際競技を直接見る機会にも、かって恵まれたことのない沖縄の人々の心情としては当然のことであるかも知れない。

人間の心情には、自らスポーツを楽しみたいという願いと共に、レベルの高いスポーツをこの目でみたいという願いが存在している。後者のための施設を作るということは住民の対外的な誇りを満足させるものとなるのであろう。このように考えるとスポーツの高度化はいたずらに排撃すべきものではなく、高度化と大衆化とが共存できるような道を求めていくことが大切なことであろうと思われる。

それは、1960年にスタートした西ドイツのゴールデンプランにみられるように、誰でも利用できるスポーツ施設の建設とその施設の活用により、選手による技術の追求を目ざす競技スポーツ（これを第1の道と呼んでいる）と老いも若きもすべて国民がスポーツを楽しむ（これを第2の道と呼んでいる）ことにより、スポーツを通じて人間回復をはかろうとする国家事業としての第1の道と第2の道であろうし、そしてそこに、中華人民共和国の体育・スポーツ政策にみられるように、第1の道の人

たちが第2の道の人たちを援助し、指導する役割を担うということがあるべき理想の姿ではないかと思われる。

このような沖縄の人たちの心情の中にあって、大学生だけは「国際競技場よりも、小さい運動場をたくさん作れ」とする人が過半数に達し、とくに男子ではその比率が80%に近い。そこに、スポーツの高度化も大衆化も共に未発達な地域において、より強く大衆化に志向するいわゆる“目ざめた”階層の存在を確認することができるのである。

(2) 構造図の論理

「小さな運動場か国際競技場か」という設問に対する大学生と他の人たちの反応のちがいがから、この間に対する反応が、その人のスポーツ意識を端的にあらわしていると考えることができる。つまり、この間に対して「まず、国際競技場を」と答える人たちはスポーツの大衆化よりもスポーツの高度化を優先させて考えている人たちであり、逆に「まず、小さな運動場をたくさん作れ」と答える人たちはスポーツの高度化よりも大衆化を優先させて考えている人たちであるということである。

人々のスポーツ意識の構造は、必ずしも論理的に首尾一貫していると思わない。例えば、国体に反対しながらも、国体の開会式をみて感動するというような、いわば理性と感情の相克、矛盾は多かれ少なかれ大部分の人の意識の中に存在している。

このような意識の矛盾を解明していく手法として、ミクロなアプローチのしかたとマクロなアプローチのしかたがある。ここでは、個々の個人差を無視し、かなり多くの人の反応を一括して統計的に処理する大数の法則にのっとって、一般的に読みとるマクロなアプローチで把握してみたい。

まず、「小さな運動場か、国際競技場か」という間に対する反応を中心にすえて、これとその他の項目に対する反応とを階層別、男女別にクロス集計し、これを χ^2 検定することによって、2つの質問項目に対する反応のあいだの相関関係の有無を調べることにした。その結果、もし「小さな運動場か、国際競技場か」という間がスポーツ意識に関する多くの項目と相関があるならば、スポーツ意識は論理的に斉合していて、この間に対する反応をスポーツ意識の指標として考えることができるし、逆に、この間が他の項目とあまり相関をもたないならば、スポーツ意識の構造は論理的にかなり矛盾しており、したがって、この間に対する反応だけではスポーツ意識の構造をうかがい知ることができないといえる。

(3) 階層別、男女別の意識の構造

χ^2 検定の結果は図1のとおりである。この図では1%

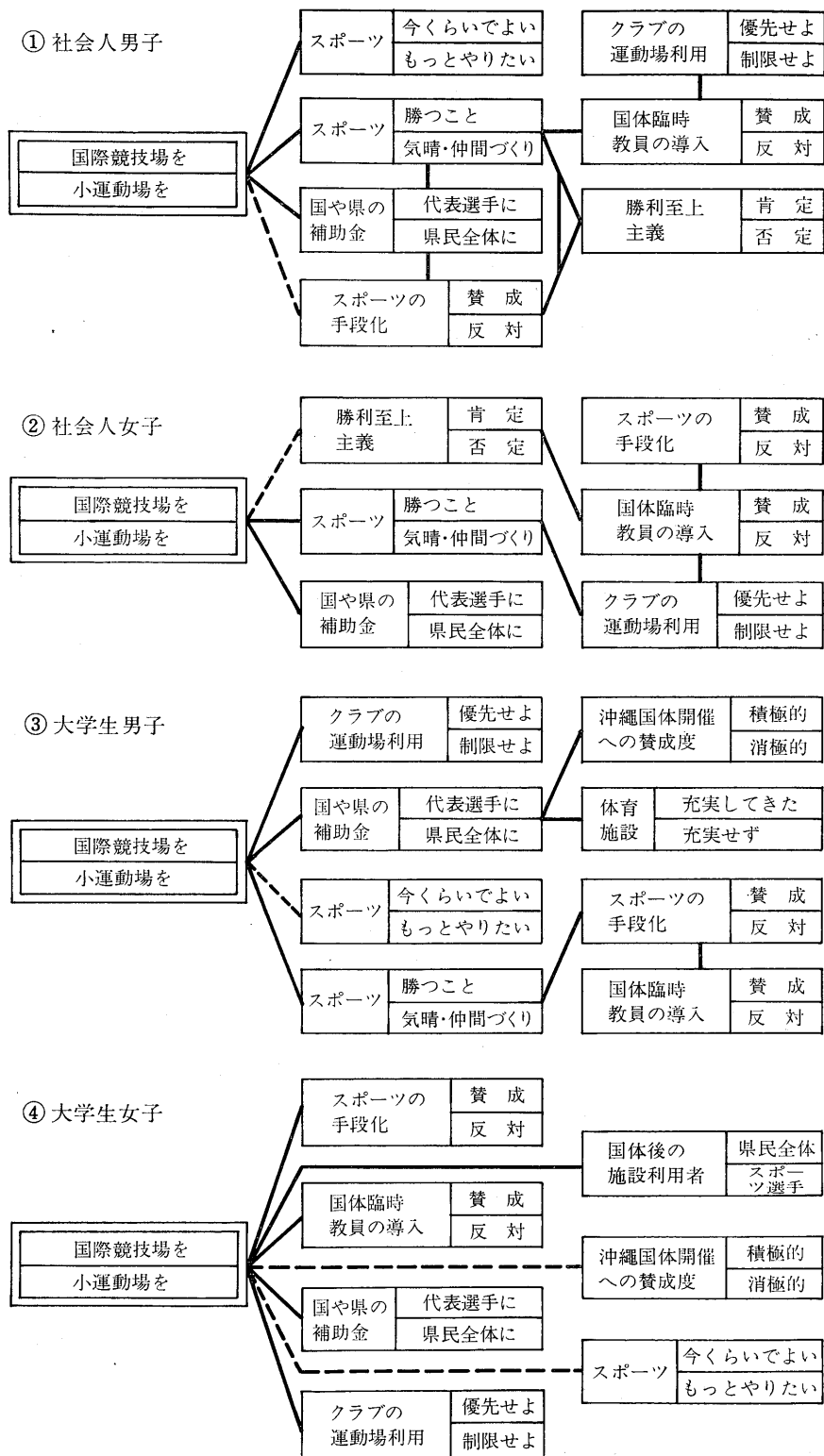
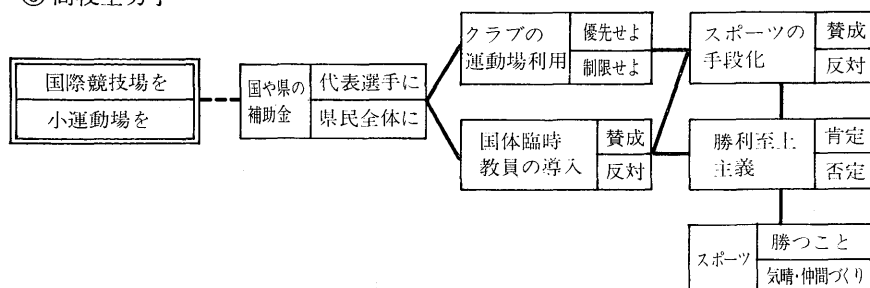
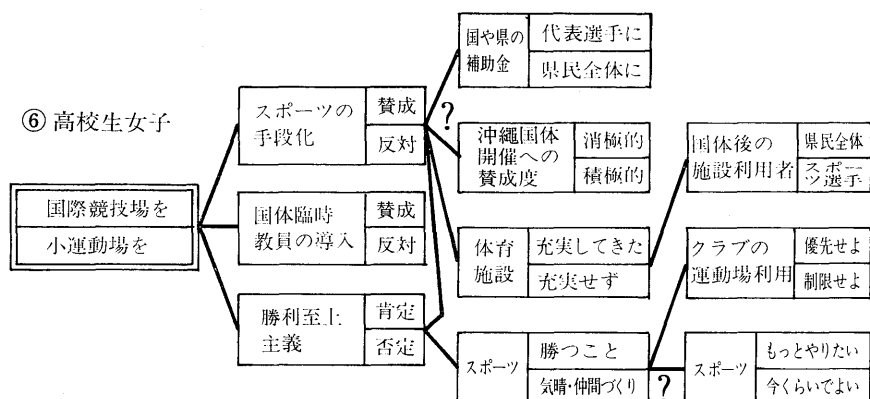


図1 「国際競技場を」とする者と「小さな運動場をたくさん」とする者の意識の構造図

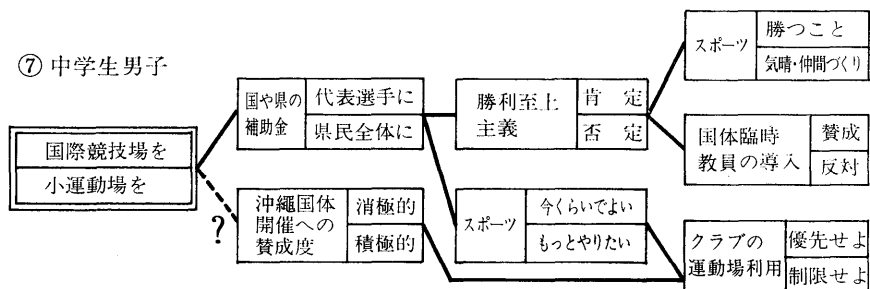
⑤ 高校生男子



⑥ 高校生女子



⑦ 中学生男子



⑧ 中学生女子

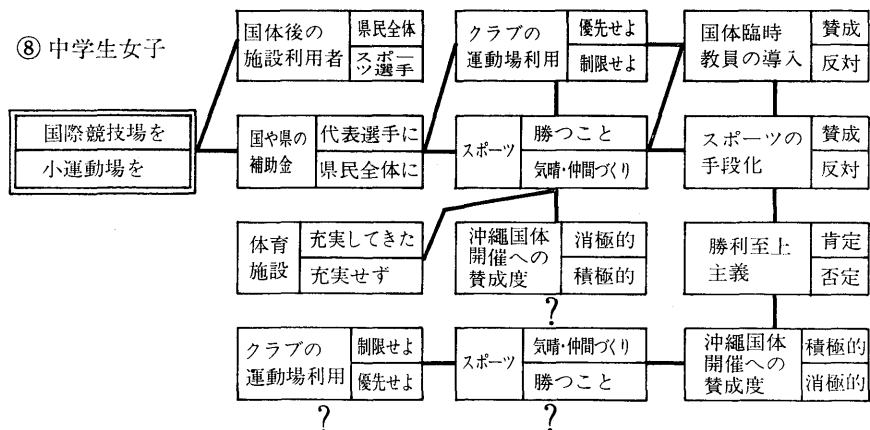


図1 「国際競技場を」とする者と「小さな運動場をたくさん」とする者の意識の構造図

レベルで有意な関連をもつものを実線で結び、5%レベルで有意な関連をもつものを点線で結んである。ただし、5%レベルの点線は「国際競技場か、小さな運動場か」という項目と直接関連のあるものについてだけ表示した。なお、図中の?印は意識の構造の一貫性に疑問のあるものである。

相関は、それぞれの項目の上の段に書いてある反応が「国際競技場を」という反応に対応し、下の段に書いてある反応が「小運動場を」という反応に対応する。したがって、例えば図1の①社会人男子については「国際競技場を」と考える人は自分でやるスポーツは今くらいでよく、スポーツは勝つことであり、補助金は代表選手に当て、スポーツの手段化に賛成し、学校のクラブ活動に運動場利用を優先させ、国体の臨時教員の導入に賛成し、スポーツの最終目的は勝つことにありと考えるのに対し、「小運動場を」と考える人はスポーツをもっとやりたいと考え、スポーツは気晴らしや仲間づくりのために行なうものであり、補助金は県民全体に及ぼし、スポーツの手段化に反対する傾向がみられるということである。

図1を通覧してみると「国際競技場を」、「小さな運動場を」という間に直接関連をもつ項目がいちばん多いのは④大学生女子である。そして、結びついている項目はみな、論理的に斉合しており矛盾するものはない。このことからデモグラフィックの階層の中で、スポーツ意識がいちばん首尾一貫しているのは大学的女子学生であるといえる。

それは1つには、沖縄における女性の大学進学率は低く、いわば大学的女子学生は女性の中のエリートで、いちばん理性的にものごとを考えることのできる能力と環境が保障されていることによるのであろう。もう1つには、調査項目の中で「あなたは現在、なにかスポーツをやっていますか」という問に対して「やっていない」と答えた女子学生が88%に達していたことから、スポーツと深いかわりあいをもつ人が少ないということ、したがって、利害得失をはなれてスポーツを客観的にみることのできる人が多いということによるものではないだろうか。

大学生の男子には女子ほど意識の構造の一貫性はみられない。一応、意識は矛盾なく連関してはいるが、その連関の度合いが弱い。女子学生にくらべ男子学生はスポーツの関心や、スポーツ行動に対して積極的であるという調査結果からみて、自らスポーツに関与する度合いが高く、理念と自己の生活感情とのギャップが一般に女子より強いためではなからうか。社会人にも大学生男子と同

じような傾向がうかがえる。

高校生と中学生の男子の意識の構造はかなり異質である。「国際競技場か、小運動場か」という項目と関連するものは少ない。しかも、中学生男子では「国際競技場を」とする者に沖縄国体開催への熱意がうすいという矛盾した関連がみられるにもかかわらず、サブレベルではスポーツ意識は矛盾なしに連関を示している。これは、理性のレベルではスポーツ意識は矛盾なしに首尾一貫しているにもかかわらず、そこに「国際競技場か、小運動場か」「国体開催は是非か」というような郷土意識をかき立てられるような質問にであうと、情緒が理性をよめかせ、意識の一貫性はそこで破たんするのである。「沖縄国体開催になぜ賛成か」とについての自由記述の回答の中に、中学生男子の答として「沖縄が有名になるから」、「沖縄を本土の人たちに知ってもらいたいから」という回答がみられた。そこに、中・高校生レベルでの男子の理性と感情の入り乱れる複雑な心情をみることができる。

一方、中学生、高校生の女子では男子よりも意識の構造は一貫性を示しているが、ここでもやはり男子と同様、沖縄国体開催への態度は論理的にみて逆相関となっている。

以上を総合して、さらに新しい知見をつけ加えれば、次のようにいうことができるであろう。

スポーツ意識の論理的一貫性という点からみれば、中学生や高校生の意識は、基本的には一貫性を示しながらも、そこに若干の矛盾や混乱が認められる。そのような矛盾や混乱をひき起こす最大の原因は郷土の名誉、郷土の誇りというような外部志向的な情緒である。それは女子よりも男子に強い。このような意識構造は、強いもの、壮大なものへの憧れに通じる幼い未熟なスポーツ意識であるということになるかも知れない。

国体のような一大セレモニーの開催、そしてそのための壮大な競技場の建設は、このような矛盾した意識に強くアピールするものとなるであろう。その結果、子供たちの意識はどのように変わるのだろうか。国際競技場が完成し、そこで展開される高度のスポーツ技術を見聞したあとで、子供たちの意識はスポーツの大衆化の方向へむかうのか、高度化の方向により強く傾斜していくのか、あるいは、この両者が混在して矛盾を一層深めていくのか、このようなことを追跡することが今後の課題として残されている。

現在の沖縄の中学生、高校生にみられるこのような若干の矛盾は大学生、社会人になるとほとんど消失している。その典型が大学的女子学生である。

大学生、社会人になると運動の機会に恵まれない人が

多く、そのために「もっとスポーツをやりたい」という願いが「国際競技場よりもまず、小さな運動場をたくさん」という要求に結びついている傾向がみられる。それが大学生では「クラブの運動場利用を制限せよ」、「補助金は県民全体に」という要求につながり、社会人では「補助金は県民全体に」、「スポーツの第1の目的は勝つことではなく、気晴らしや仲間づくりにある」という意識につながっている。

このようにみえてくると、スポーツの大衆化に志向する意識を育てる基底は「もっとスポーツをやりたい」という要求を掘り起こすことであり、体育関係者はそのための魅力あるプログラムを数多く県民に提供しなければならないといえる。

B 3つの次元のスポーツ意識の構造

〔1〕スポーツの「価値観」「志向性」「目標観念」についての意識構造

研究の方法の〔4〕のBで述べたように、スポーツの「価値観」、「目標観念」、「志向性」について、それぞれタイプを2つに分類したのであるが、この2つのタイプの比率を階層別、男女別に比較することによって意識の傾向をみることにした。

1) 「実利的価値観」対「非実利的価値観」

スポーツを行なう人々の心はさまざまである。スポーツを楽しむことに目的をもち、その結果や利益を期待しないというスポーツの無目的性を肯定する人、厳しい選手生活を通じて肉体的苦痛を忍び、危機に臨んで失望しない気力、つまりスポーツによって精神面の育成を強調する人、練習によって不可能を可能にするという練習の体験によって自己開発に役立てようとする人など、スポーツを行なう人々がスポーツの価値を認めることができても、その価値観は様ではない。

スポーツによる自己形成と趣を異にしたスポーツ技術の手段化としての実利的な面での価値、すなわち、会社の宣伝に利用したり、進学や就職に役立てようとするスポーツの実利的な価値と、それを否定する非実利的な価値とのいづれを優先して考えるかについては図2で示すように階層別、男女別とも一定の法則性をみることができる。

その法則性とは、男女とも中学生→高校生→大学生と移行するにつれて、スポーツの実利的価値観に志向するタイプが減って非実利的価値観に志向するタイプがふえているのに、社会人になると実利的価値を優先する方向に逆もどりをするということである。

このような一定の傾向を表示することに寄与している

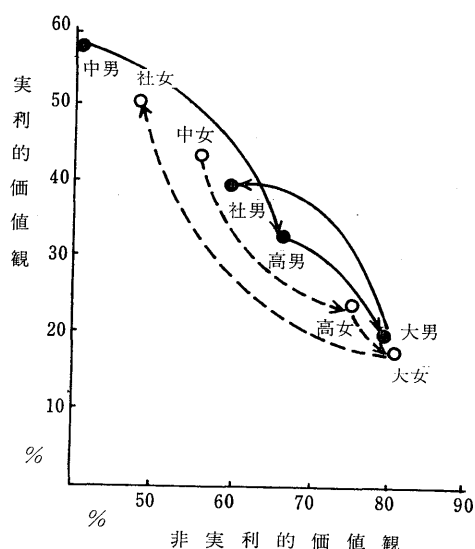


図2 スポーツの価値観

項目は次のようなものである。

調査項目のうち、「スポーツ選手の進学や就職の条件が有利になる」ことについて、「そんないいことはない」という反応の比率が高かったのは中学生と社会人であり、「有利になるからといって選手になる必要はない」という反応の比率が圧倒的に高かったのが大学生であった。

中学生段階では現に、スポーツ選手がマスコミに一躍クローズアップされることによって、スポーツ選手への憧れの念がかきたてられ、それが背景となって、できることなら自分も選手になりたいという意識が強く働き、その意識が入学や就職にも好条件をもたらすということにもつながっていくのであろう。しかし、このような意識が働くことについては、現に社会の中にスポーツ選手を擁護するという風潮もあるということを見のがすことができない。

一方、入学や就職などの際に、スポーツ選手であるからということによる、いかなる特権も認めてはならないという主張が高校生、大学生段階になるとみられるようになる。特に大学生ではそれが強くなる。

社会人にとっては、マスメディアを通じて流されるスポーツ選手の華やかな生活行動を自分のそれと対比することによって、そこに現実感としてのスポーツの実利的な価値が優先せざるを得ないことになるのであろう。それを裏づけるものとして、調査結果の中で、沖縄の人々はプロ野球の視聴を好み、プロ野球を全く見ない人の比率が男子では10%を割っていることからもうかがえる。

2) 「高度化志向」対「大衆化志向」

スポーツの高度化志向と大衆化志向については、調査結果から「クラブの運動場使用を制限して一般の学生、生徒にも運動場を開放すべきだ」という意見が全体で70%に達し、「国や県の援助金は代表選手よりも一般住民に」という意見が全体で80%に達している。このことは、スポーツの高度化よりも大衆化に強く志向している結果といえる。

このように、どの階層も大衆化に志向しながらも、その志向の度合は図3でみるように、スポーツの価値観と

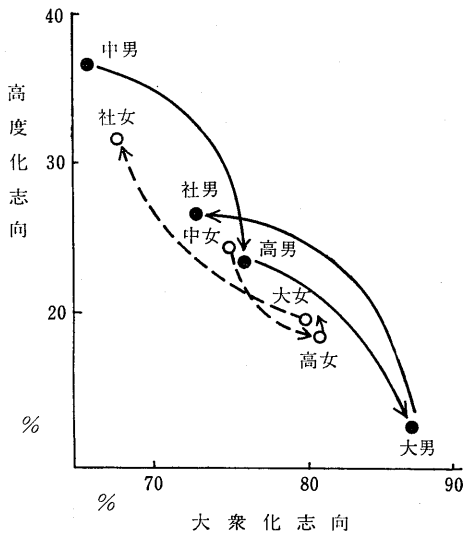


図3 スポーツの志向性

同様な傾向にある。つまり、中学生、高校生、大学生の順にスポーツの高度化志向から大衆化志向へと傾斜していくのに、ここでも社会人になるとスポーツの高度化志向の方向へ逆もどりしてしまうのである。

このような傾向を生み出す最大の要因は、先に述べた「小さな運動場か、国際競技場か」という問に対する反応である。「小さくてもよいから多く」の比率が大学生に高く、「国際競技場を」の比率が中学生と社会人に高いのである。

現在、国際競技場をもたない沖縄の人々にとって対外的な誇りを満足させたいということは当然のことであるといえる。その心情の度合は、スポーツ意識の未熟な階層ともいべき中学生、高校生段階では強く、スポーツ意識がもっとも整合されてくる大学生では対外的な誇りの情感から脱皮して、自らスポーツに親しむ条件を強く望むようになり、それが「国際競技場よりも小さな運動場を多く」という願いとなってあらわれている。

社会人になるとスポーツ行動に困難さがともなう。その第1の理由として「忙しいから」ということがあげら

れている。このような現実をふまえてみると、社会人には自分で行なうスポーツよりも見るスポーツ、中でもプロ的な高度な試合を見て楽しみたいという願いがあり、その条件となる国際競技場を望む人がかなりの数に達しているといえる。

3) 「勝利目標主義」対「享受目標主義」

スポーツの勝利目標主義か享受目標主義かについては調査結果の中で「スポーツは勝つことよりも気晴しや仲間づくりをすることである」、「スポーツは勝ち負けにこだわることはない」という意見がいずれも80%に達している反面、「ニチボー貝塚が東京オリンピックで優勝したことはすばらしい」と答えた人が全体で80%、「沖縄国体で沖縄の選手に勝ってほしい」と答えた人が全体で約70%となっている。

このように、人々にはスポーツは享受するものであると同時に、スポーツは勝たなければならないという意識が心の中に同居している。このことは、自ら行なうスポーツを中心にすえた場合は、前者のスポーツの享受目標主義に立ち、見るスポーツ、いわゆる知的遊戯としてのスポーツを中心にすえた場合は、後者のスポーツの勝利目標主義に立つという2面性を同時に人々はもちあわせているといえる。

図4は、スポーツの目標観念についての相関図である。この図はスポーツの価値観や志向性の場合とは、ややちがった傾向を示している。つまり、勝利目標主義から享受目標主義への移行は、男女とも高校生→大学生へと一定の方向性を有しながらも社会人になると勝利目標

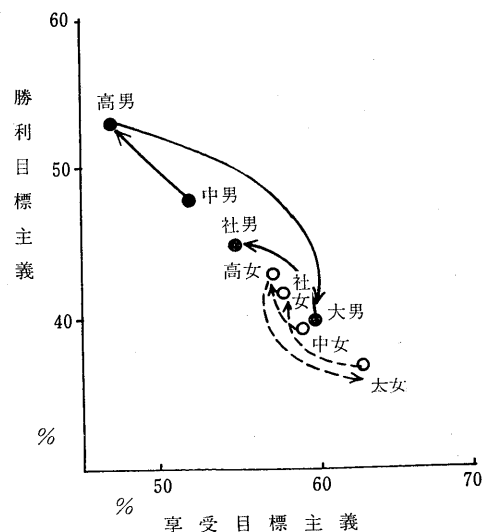


図4 スポーツの目標観念

主義優先へ方向に逆もどし、中学生の意識も社会人レベルに近いということである。このことは、自らスポーツを行なうことによって歓びを享受したいということと、スポーツを知的遊戯としてそれに満足したいという意識の2面性が階層を問わず、心の中に混在していることを意味しているものと思われる。このような中において、目につくのが女子よりも男子の方が勝利目標主義に傾斜していることである。

〔2〕 スポーツの「価値観」「目標観念」「志向性」をクロスした意識構造

図5は、スポーツの「価値観」と「志向性」、図6は、スポーツの「志向性」と「目標観念」、図7は、スポー

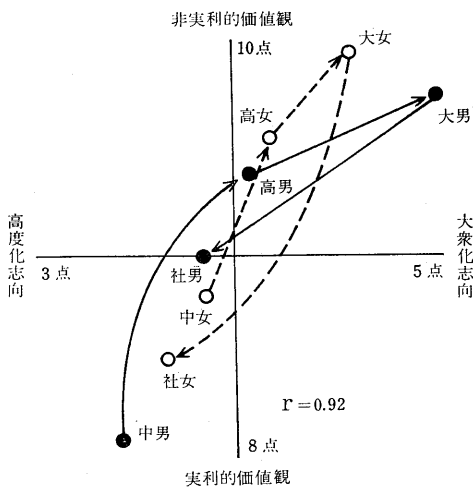


図5 「価値観」×「志向性」

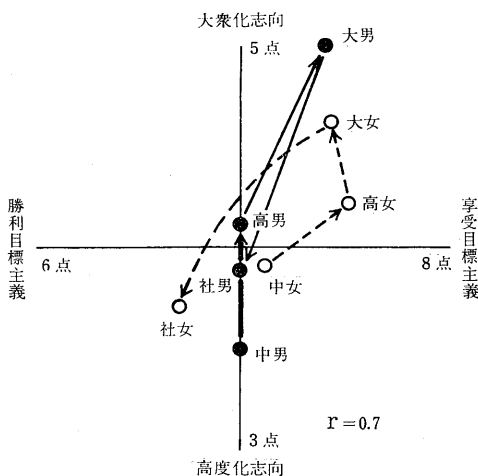


図6 「志向性」×「目標観念」

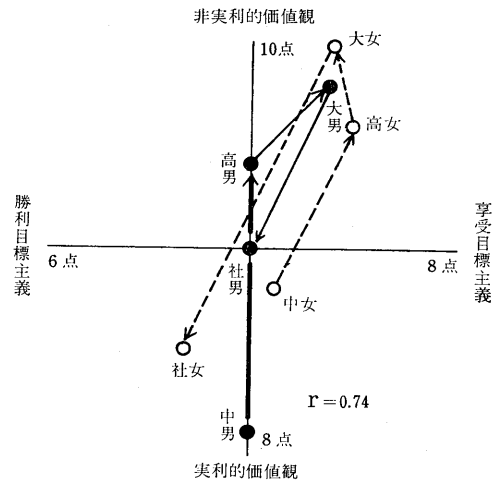


図7 「価値観」×「目標観念」

ツの「価値観」と「目標観念」との相関図であり、いずれも高い相関がみられる。

つまり、スポーツの非実利的価値に志向する階層は「享受目標主義」、「大衆化志向」に傾斜し、逆にスポーツの実利的価値に志向する階層は「勝利目標主義」、「高度化志向」に傾斜するのである。そして、中学生、高校生、大学生の順に後者から前者へと移行し、そして社会人になると再び前者から後者へと逆もどりしてしまう。この傾向は、先の図2～図4の場合と全く同じである。したがって、スポーツ意識に共通性のみられる階層は中学生と社会人、高校生と大学生であるといえる。

中学生と社会人はスポーツの「実利的価値観、勝利目標主義、高度化志向」というスポーツの生産性（目的性）に志向し、その志向の度合は特に社会人女子に強いのである。

高校生と大学生はスポーツの「非実利的価値観、享受目標主義、大衆化志向」というスポーツによる成果や実利は期待せず、スポーツを楽しむことを第1義的にとらえようとするスポーツの無目的性に志向し、大学生の意識がそれを顕著にあらわしている。

本来、スポーツ活動には余暇と経済力がともなわなければならない。

調査の対象となった社会人のきわめて多くは戦中、戦後を通じ混沌とした沖縄の社会情勢の中を現在まで生きぬいてきた人たちである。したがって、スポーツに親しむ機会に恵まれなかったことは事実である。いいかえれば、スポーツする楽しみや歓びを体験する余裕のなかった人たちである。社会人にみられるスポーツ意識はスポ

ーツする喜びを享受しない人々のスポーツ意識とでもいうべきものであり、それを端的にあらわしているのが社会人の女子であるということができよう。このような意識は中学生段階にみられるスポーツ選手への憧れでしかない未熟なスポーツ意識に類するものであろう。

高校生、大学生段階のスポーツ意識は学校体育を通じて、スポーツする喜びの体験が基盤となり、自ら積極的にスポーツの実践を欲する、いわゆるスポーツの大衆化、生活化に志向しているということがいえよう。

5 むすび

(1) スポーツ意識は論理的には、運動場建設に際して「立派な国際競技場を」とする者は、スポーツの実利的価値、高度化志向に賛成し、スポーツの勝利目標主義を肯定する立場をとり、「小さな運動場をたくさん」とする者は、スポーツの非実利的価値、大衆志向に賛成し、スポーツの享受目標主義を肯定するということであろう。

これらの意識の分析結果は階層を問わず、論理的にみてもいずれも相関があり、意識の一貫性がみられた。したがって、スポーツ意識の論理的一貫性という点からみれば、沖縄の中学生から社会人にいたるまでの意識構造は基本的には一貫性を示している。

(2) 沖縄の中学生、高校生段階にみられるスポーツ意識は理性のレベルでは矛盾なしに一貫性を示しているにもかかわらず、若干の矛盾や混乱が認められる。そのような矛盾や混乱をひき起こす最大の原因は、「国体開催はか非か」というような郷土の名誉や誇りという郷土意識をかきたてられる質問にであうと、情緒が理性をよるめかせ、そこで意識の一貫性がくずれるということである。このような意識構造は幼い未熟なスポーツ意識によるものと思われる。

(3) 中学生、高校生段階にみられるスポーツ意識の若干の矛盾は大学生、社会人段階になると整合され、矛盾するものはなくなる。中でもスポーツ意識がいちばん首尾一貫しているのは大学生の女子である。

(4) 下記の3つの次元でのスポーツ意識は、高い相関と一定の法則性が存在する。その法則性とは、中学生→高校生→大学生へと一連の意識の方向性を有しながらも、社会人になると中学生レベルの意識の構造に逆もどりするということである。

すなわち、中学生と社会人はスポーツの「実利的価値観、勝利目標主義、高度化志向」を支持し、高校生と大学生はスポーツの「非実利的価値観、享受目標主義、大衆化志向」を支持する傾向にある。

6 課 題

2の構想の中で今回は、復帰前のことを調べた。あと残っているのは、特別国体開催期間中と特別国体後数年経過時の調査である。

今後、沖縄復帰にともなう沖縄国体の開催、本土との体育・スポーツ交流の活発化、各種の体育・スポーツの振興策等々、激動する状況の中で、沖縄の人たちのスポーツ意識がどのように変容していくのか、その変容の過程を実証的にとらえたい。

謝 辞

本研究は名古屋大学小林篤助教授のご指導によるものである。沖縄のスポーツの現況と調査については琉球大学外間政太郎助教授、宮城勇助教授にご指導ご支援を、調査の実際にさいしては沖縄の中学校、高等学校関係者20余名の先生方にご協力を賜わった。そのお名前を省略させていただく非礼をお許し願いたい。調査の集計にあたっては本学山崎正利講師、下田次雄助手にご尽力願った。誌上を借りて諸先生方に心からなる謝意を表します。

なお、本研究は昭和46年度本学特別研究費の援助によって研究、調査がすすめられたことに対し、深く感謝の意を表します。